

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月25日現在

機関番号：32412

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15H03432

研究課題名（和文）ピアサポートの意義および効果に関する包括的研究

研究課題名（英文）Comprehensive research on the significance and effect of peer support

研究代表者

相川 章子（AIKAWA, Ayako）

聖学院大学・心理福祉学部・教授

研究者番号：60383303

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 11,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はピアサポート（同様の経験をした仲間同士による支え合いの営み）の意義および価値、役割に関する効果および理論構築とした。

障害福祉サービス事業所（就労継続B型事業所および地域活動支援センター）のピアスタッフを雇用群と非雇用群の新規利用者を対象に18ヶ月の縦断的調査の結果では、リカバリーやストレンクス等について効果が認められたものの、両群の差は認められなかった。ピアスタッフによるピアサポート的要素を踏まえ、ピアサポートの意義として自身のリカバリー経験、ピアサポートによるエンパワメント経験から対等な関係性で互いにリカバリーの道を歩むことが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

精神疾患および精神障害は原因不明の疾患を元とし、疾患そのものの辛さ以上にスティグマや社会的環境の未整備等により様々な生きづらさを抱え込む。社会生活上の生きづらさから精神疾患を発症する場合もあり、人間社会のなかで生じた社会的課題ともいえる。先の見えない暗闇から救ったのが唯一同様の経験をした人との出会い、またその方の語りだったとする当事者は多いものの、偶然の出会い等に委ねられている現状がある。

まずはピアサポートの意義および価値を実証的に明示し、可視化したことは社会的意義がある。すべての人のピアサポートの意義および価値へと汎化することが今後の課題である。

研究成果の概要（英文）：In this project, we focused on the effectiveness related to meaning, significance, and roles of peer support (mutual support of peers with similar experiences) and theory development. In an 18-months longitudinal study with new users of service by peer staff, in employment and non-employment groups, of disability welfare service agencies (Continuous Employment Agencies Type B), while effects on recovery and strengths were validated generally, difference between the two groups was not demonstrated. Overall, the significance of peer support was shown in the form that peer staff and service users both proceeded with recovery based on equal based relationship from own experience of recovery and experience of empowerment through peer support.

研究分野：社会福祉 精神保健福祉 ピアサポート

キーワード：リカバリー ピアサポーター ピアスタッフ 縦断的研究 理論構築

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

(1) ピアサポートの意義・効果に関する研究動向

ピアサポートとは「仲間同士の支え合いの営みのすべて」と定義され、その構造としては①インフォーマル（自然発生的）、②フォーマル（意図的）、③仕事としてのピアサポートの三層に分類することができる。これらの概念は教育現場から発展し、医療、保健、福祉領域へと活用が広がっている。ピアサポートの意義や効果に関する実証的研究は、教育領域においてなされているが、保健医療福祉領域においては実践報告にとどまっておらず実証的研究はなされていない状況があった。加えてピアサポートの基盤となる意義や価値を明記した理論構築もみられなかった。

(2) ピアスタッフの意義・効果に関する研究動向

ピアスタッフとは、サービスの受け手でありかつ送り手でもあり、自らの経験を生かしピアサポートの機能を発揮して報酬を得ている人と定義され、保健医療福祉領域において、その導入が急速に広がってきた。プロシューマーは単に当事者であるということだけで成立するものではなく、ピアサポート的関係性を基盤として自らの経験を活かし、仲間（ピア；サービス利用者のこと）のリカバリーに寄与することのできる職種である。つまりピアサポートの促進者であり、ピアサポート的感覚、ピアサポート的機能の宝庫とも言える人材である。近年、ピアスタッフに焦点を当てた研究が欧米中心に積み重ねられており、ピアスタッフ導入によりサービス利用者の社会機能やQOLの向上、入院日数減少、またピアスタッフにとっても自己効力感、対処技能が向上するなどのアウトカムが示されてきた。つまり欧米諸国においてはピアスタッフ導入によりその導入の環境を整えれば、利用者、ピアスタッフ共にリカバリーへ向かうとの報告がなされてきたと言える。

一方、日本においてはその効果を示す実証的研究はなされていない。

(3) 着想に至った背景

以上の研究動向より、日本においてはピアサポートに関する実証的研究および理論的基盤となる研究は少なく、とりわけ本研究を含む保健医療福祉領域を対象とした研究はみられない。

研究代表者は平成20～22年に文献調査を実施し、ピアスタッフ（当時の研究ではプロシューマーを使用）の有効性としてピアサポートが主要な機能を果たしていることを示した。また平成23～25年にはピアスタッフの生成過程およびその構造解明に挑戦した。そこでピアスタッフは支援システムのなかでサービスの受け手でありかつ送り手であるという独自の新たなポジションを確立しているプロセスを示した。このポジション創設においては支援システム全体で構築することが必要であり、新たなポジション生成によってピアスタッフの固有性（専門性）が発揮されることを示した。

しかし一方で、ピアスタッフとして雇用されながらも継続できない事例等も少なくない現状から、ピアサポートの理論的基礎が不明確なまま導入されることへの危険性を認識した。

そこで、ピアサポートの効果検証と、理論構築を合わせて研究することに大きな意義があると考え、本研究に着手するに至った。

2. 研究の目的

本研究は精神障害のある当事者同士によるピアサポートの理論構築と、ピアサポートによる効果について明らかにすることである。

(1) ピアサポートの効果検証：精神障害のある当事者同士によるピアサポートがどのような効果があるのかについて、縦断的に実証研究を実施し明らかにする。

- ① 地域における精神保健福祉サービス事業所（地域活動支援センター、就労継続支援B型）の新規利用者の方々のサービス満足度やQOL、リカバリー、ストレングス、職場の統合などのアウトカムをモニタリングし、その変化を評価すること。
- ② ピアスタッフを雇用している事業所と、雇用していない事業所を比較しアウトカムの差を評価すること。

(2) ピアサポートの理論構築：精神障害のある当事者同士によるピアサポート（仲間同士の支え合いの営みのすべて）の構造的解明を含む理論構築を深化させることである。

3. 研究の方法

(1) ピアサポートの効果検証（図1）

ピアスタッフ雇用の事業所と非雇用の事業所のそれぞれの新規利用者およびスタッフ、ピアスタッフへの自記式調査による縦断的なモニタリングを実施し、アウトカムの変化を比較することでピアサポートの効果を評価・検証する。

- ① 対象：首都圏および福岡県における精神保健福祉サービス事業所（地域活動支援センターおよび就労継続支援B型）で、ピアスタッフを雇用している事業所、雇用していない事業所それぞれの新規利用者とした。さらに対象者の導入基準は、首都圏および福岡県の地域活動支援センター（Ⅰ～Ⅲ型）、就労継続支援B型事業所の新規登録ケースで、精神障害（主診断が認知症、薬物依存、知的障害、発達障害を除く）のある20歳以上の成人）の方とした。

- ② サンプルサイズ (目標症例数) : ピアスタッフのいる事業所 173 名・いない事業所 86 名 = 259 名 (ピアスタッフの有無で比率を 2:1、脱落率 60%)
- ③ 調査方法 : 調査開始時、9 ヶ月後、18 ヶ月後の追跡調査を実施
- ④ 調査時期 : リクルート期間 2016 年 4 月 ~ 2017 年 9 月、各々の 9 ヶ月後、18 ヶ月後をモニター、調査終了時期 2019 年 3 月。
- ⑤ 調査項目 (アウトカム) は、利用者の自記式アンケート (尺度) として、① サービス満足度 (主要エンドポイント) : CSQ-8、② 生活の質/ウェルビーイング : WHO-5、③ パーソナル・リカバリー : OPR、④ セルフ・スティグマ : King stigma scale、⑤ 社会的活動における動機付け : MSA を実施した。またスタッフによる評価として GAF (機能)、MS (症状) を実施した。
- ⑥ 倫理的配慮 : 文部科学省および厚生労働省の「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に基づいて実施した。また、本研究のプロトコルは UMIN 臨床試験登録システム (UNMIN-CTR) に登録されている (No. UMIN000021701)。聖学院大学研究倫理委員会の承認を得た (第 2015-010 号)。

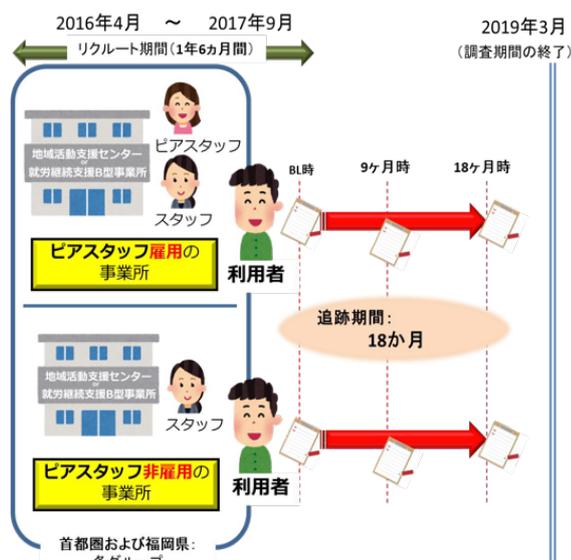


図 1 効果評価—研究方法

(2) ピアサポートの理論構築

ピアスタッフが経験しているピアサポートの相互作用の要素を明らかにし、それをピアサポートの基礎的エビデンスとしてピアサポートの理論構築を展開する。

- ① 対象 : 首都圏および福岡県で調査協力をえた 12 事業所 (地域活動支援センター、就労継続支援 B 型、相談支援事業所、多機能型事業所) にて勤務するピアスタッフ 17 名。
- ② 調査時期 : 2016 年 5 月。
- ③ 調査方法 : 1 グループ 4~5 名の研究協力者によるフォーカスグループインタビューを実施。首都圏 2 グループ、福岡県 2 グループの計 4 グループ。進行役として調査者 2 名が入る。
- ④ 調査項目 (インタビューガイド) : 1. 同じような経験をしている方との出会いで自身に影響を与えた、もしくは、転機となった出会いはありましたか。 2. ピアスタッフとして働く中で、利用者 (やご家族) とのかかわりで印象に残っていることがありましたか。 3. ピアスタッフとして働く中で自身の経験や強みをどのように活かしていますか。 4. 専門職者の関わり (支援) とピアスタッフの関わりで違いはどのようなことだと思いますか。 5. 自身の経験をふまえて、ピアスタッフはどのような役割や意義があると思いますか。
- ⑤ 調査時間 : 平均 113 分/1 グループ
- ⑥ 分析方法 : 質的記述的分析を地域精神保健に関する研究・臨床経験のある研究者等 5 名により行った。録音データを逐語記録におこし、「ピアスタッフが経験しているピアサポートの相互作用」に着目し、コード作成、カテゴリ化を行った。
- ⑦ 倫理的配慮 : 文部科学省および厚生労働省の「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に基づいて実施した。聖学院大学研究倫理委員会の承認を得た (第 2015-010 号)。

4. 研究成果

(1) ピアサポートの効果検証

- ① リクルートのフローと研究計画違反 (図 2)

サンプルサイズ (目標症例数) からベースラインおよび最終分析者数は大幅に減じた。

- ② 脱落者の傾向 (表 1)

ベースラインにおける他の基本属性や尺度については有意差は見られなかった。脱落者の約 80%以上が症状悪化、

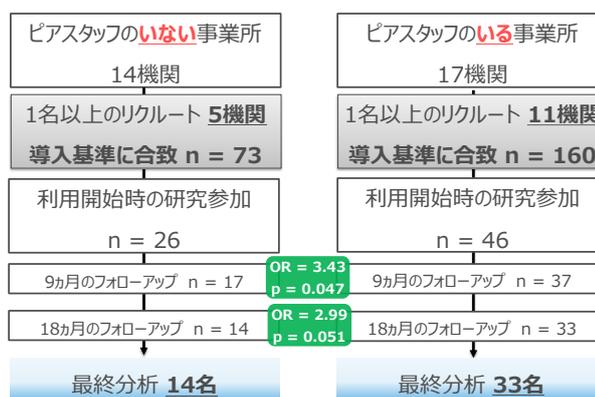


図 2 リクルートのフローと研究計画違反

通所不安定、音信不通など「ポジティブな卒業（例えば就労など）」ではなかった。

- ③ 基本属性：有意差は見られなかった。
- ④ ベースライン得点：有意差は見られなかった。
- ⑤ サービス満足度（主要エンドポイント）：両群に有意差は見られなかった。また、支援開始時から変動も得られなかった。（図3）
- ⑥ ウェルビーイング：両群に有意差は見られなかった。（図4）
- ⑦ その他のアウトカム：ソーシャルサポートの人数、パーソナル・リカバリー、セルフスティグマ、社会的活動における動機付け、のそれぞれの主観的・自記式尺度においても両群に有意差は見られなかった。（図5）
- ⑧ 機能および症状：スタッフ評価による機能評価（GAF）および症状（MS）においても両群に有意差は見られなかった。（図6）

表1 脱落した人の傾向

	調査脱落 (n=25)		調査継続 (n=47)		x ² /t	p
BL就労	8	32.00	4	8.51	Fisher's exact = 0.018	
BL未就労	17	68.00	43	91.49		
BL一人暮らし	6	24.00	21	44.68	X ² = 10.542 P = 0.032	
BL家族同居	16	64.00	22	46.81		

(2) ピアサポートの理論構築

- ① 対象者の基本属性
 - 年齢：40代が最も多く60%、次いで30代30%、50代10%
 - 性別：男性が70%、女性30%
 - 勤務年数：1-5年が最も多く47%、次いで5-10年26%、1年未満16%、10年以上11%
 - 精神科領域での勤務年数：5-10年が最も多く45%、次いで1-5年および10年以上22%、1年未満11%
- ② 分析結果：録音データ（逐語録）より248コード生成、48サブカテゴリー、8カテゴリーが生成

(3) 考察

- ① ピアサポートの効果検証の結果から得られる考察

日本のピアサポーターによるピアサポートの効果について、地域におけるサービス事業所に通う新規利用者の18ヶ月の変化により検証したが、本研究においてはピアサポーターの有無による両群に差は得られなかった。欧米諸国においても当初の研究と同様にピアサポーターの導入は利用者に対して「特段の害はない」とする結果となった。逆を言えば専門職による支援の効果と同様の効果が得られているとも言える。

一方、両群ともに向上したのは機能（GAF）および症状（MS）である。障害福祉サービス事業（就労継続支援B型および地域活動支援センター）は利用者の機能の向上、症状の軽減への効果的なサービス提供がなされていると言える。

以上より、「ピアサポーターを雇用すること自体が、その機関の実践にリカバリー志向サービスへの転換に向けたパラダイムシフトを生み出すわけではない。」(Slade et al, 2014)

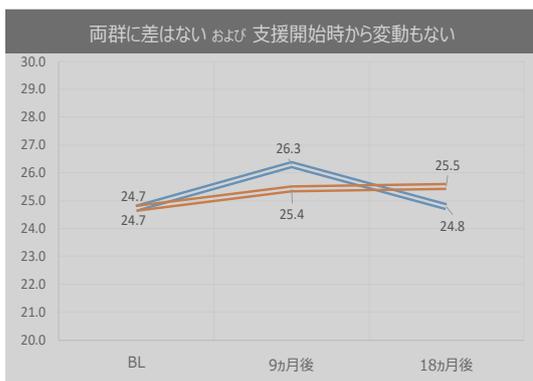


図3 サービス満足度

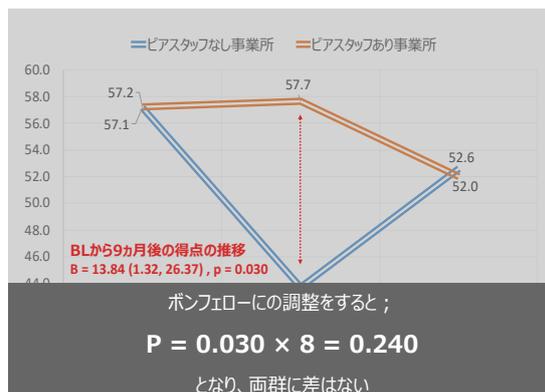


図4 ウェルビーイング

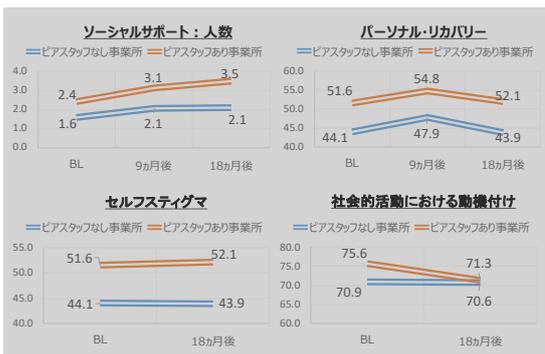


図5 その他のアウトカム：主観的・自記式尺度



図6 機能と症状：スタッフ評価

とする先行研究を実証したといえる。

② ピアサポートの理論構築の結果からえられる考察

ピアスタッフが行う「ピアサポートの相互作用の要素」として、次のことが考察された。

「ピアスタッフは自分自身のリカバリーの経験や仲間の存在に力を得た経験をもとに、利用者の状況への理解を深め、力や可能性を感じている。より対等な関係性の中で、利用者の希望をくみ取り、適切なタイミングで自身の経験を開示することで、利用者の変化とともに、自身の変化や自身の経験の持つ価値も感じている」

一方で、ピアスタッフはピアサポートの相互作用のなかで感じる「苦悩・苦労」について下記の通り考察された。

「自分自身の経験からわかることの限界を感じ、経験の伝え方に悩んだり、適切なタイミングで自分の経験を伝えられず躊躇することもある。また、相手に頼られない状況への不安や相手の反応への揺らぐ一面もあり、相手の望むことにあわずにネガティブな反応を受けたり、相手のピアスタッフであることを利用者から厳しい目で見られるような状況に苦悩する様子も見られた」

③ 本研究の限界と今後の研究に向けて

本研究は、国内で初めての福祉事業所におけるピアサポートの縦断研究を行なったことには意義があったものの、サンプルサイズが少なく効果検証に限界があった。またピアサポート、ピアサポーターに関する包括的な理論構築には限界があった。今後、日本におけるピアサポートを包括する理論構築を、先行研究とあわせて深化させていく。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計4件)

- ① 水野雅之、種田綾乃、澤田宇多子、相川章子、Naoko Yura Yasui、山口創生、ピアスタッフとともに働くこととスタッフの支援態度および職場環境との関連-クロスセクショナル調査-、精神医学、査読有、第60巻7号、2018、773-781
- ② Ayako Aikawa, Naoko Yura Yasui, Becoming a consumer-provider of mental health services: Dialogical identity development in prosumers in the United States of America and Japan, American Journal of Psychiatric Rehabilitation, 査読有、20巻2号、2017、175-191
- ③ 相川章子、ピア文化とコミュニティ・インクルージョン、精神科、査読無、31巻6号、2017年、538-543
- ④ Mizuno, M., Yamaguchi, S., Taneda, A., Hori, H., Aikawa, A., & Fujii, C., Development of Japanese version of King's Stigma Scale and its short version: psychometric properties of a self-stigma measure, Psychiatry and Clinical Neurosciences, 査読有、71巻、2016、189-197 DOI : 10.1111/pcn.12470

[学会発表] (計9件)

- ① 山口創生、種田綾乃、相川章子、地域福祉サービス事業所におけるピアサポーターの有無によるアウトカムの比較：縦断研究 (PAL-J study)、第8回日本精神保健福祉学会全国学術研究集会 東京大会、2019.6
- ② 種田綾乃、濱田由紀、御藪恵将、相川章子、荒井浩道、障害福祉サービス事業所で働くピアスタッフが経験しているピアサポートの相互作用～ピアスタッフに対するフォーカスグループインタビューから～、社会精神医学会 (東京)、2019.3
- ③ 御藪恵将、種田綾乃、濱田由紀、相川章子、荒井浩道、ピアスタッフとして働く人が経験するピアサポートの相互作用、第25回日本精神障害者リハビリテーション学会 久留米大会、2017.11
- ④ 種田綾乃、山口創生、相川章子、ピアスタッフを雇用する障害福祉サービス事業所におけるピアスタッフおよび共に働くスタッフの支援態度と職場環境、日本社会福祉学会秋季大会 (首都東京大学)、2017.10
- ⑤ 種田綾乃、御藪恵将、澤田宇多子、相川章子、濱田由紀、Naoko Yura Yasui、山口創生、精神保健福祉サービス事業所で働くピアスタッフの業務エフォートと主観的状況との関連、日本社会精神医学会 (京都大会)、2017.3
- ⑥ 荒井浩道、相川章子、濱田由紀、ピアサポート×ナラティブ「経験の語り」を差し出すことによる支え合い、第5回ナラティブ・コロキウム、駒澤大学深沢キャンパス、2017.3
- ⑦ 種田綾乃、山口創生、水野雅之、濱田由紀、澤田宇多子、相川章子、精神保健福祉サービス事業所で働くピアスタッフの勤務実態～ピアスタッフ自身の主観的な状況に着目して～、日本精神障害者リハビリテーション学会 (長野大会)、JA長野ビル (長野県)、2016.11
- ⑧ 水野雅之、種田綾乃、山口創生、相川章子、藤井千代、セルフスティグマ尺度の作成と信頼性・妥当性の検討、2015年度援助要請研究会、大阪教育大学天王寺キャンパス、2016.3
- ⑨ Naoko Yasui, Ayako Aikawa, Workplace Inclusiveness as Experienced by Mental Health Peer Support Providers, 31st Annual Pacific Rim International Conference on Disability and Diversity (国際学会)、Hawai'i Convention Center (USA)、2015.5

[図書] (計 0 件)
[産業財産権]
○出願状況 (計 0 件)
○取得状況 (計 0 件)
[その他]
なし

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：荒井 浩道

ローマ字氏名：(ARAI, hiromichi)

所属研究機関名：駒澤大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号 (8 桁)：60350435

研究分担者氏名：山口 創生

ローマ字氏名：(YAMAGUCHI, sosei)

所属研究機関名：国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所

部局名：地域・司法精神医療研究部

職名：室長

研究者番号 (8 桁)：20611924

研究分担者氏名：濱田 由紀

ローマ字氏名：(HAMADA, yuki)

所属研究機関名：東京女子医科大学

部局名：看護学部

職名：非常勤講師

研究者番号 (8 桁)：00307654

研究分担者氏名：種田 綾乃

ローマ字氏名：(TANEDA, ayano)

所属研究機関名：神奈川県立保健福祉大学

部局名：保健福祉学部

職名：助教

研究者番号 (8 桁)：70643261

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：水野雅之

ローマ字氏名：(MIZUNO, masayuki)

研究協力者氏名：御園恵将

ローマ字氏名：(MISONO, keisuke)

研究協力者氏名：澤田宇多子

ローマ字氏名：(SAWADA, utako)

研究協力者氏名：Naoko Yura Yasui

ローマ字氏名：(YASUI, yura naoko)

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。